

(・・・・・・は中略部分。青太字は引用者によります。)

「どんな婦人になりたいの」と英語で尋ねられたとき、「自立した女、社会で自分を生かせるようなそんな女にいたい」と答えた同じ人間が、別の機会に同じことを日本語で尋ねられて、「良い人を見つけて、結婚して良い家庭をつくりたい」と答えたという。ハワイの日系三世のお嬢さん、英語と日本語が完璧に話せる少女の話である。**日常言語でも、一つのシステムから別のシステムへ移ることは、人間の思考様式や価値意識まで変えてしまうことなのだ。そうした意味で、言語それ自体が「政治的」性格をもつ**ことは今さら言うまでもないが、一面、この話は、一人の人間が複数性を実現していることの好例と考えることもできる。一つのシステムと別のシステムとの間を、いとも簡単に（なのだろうか）飛び越えてしまうかに見える、バイリンガルな能力というのは、しかし、本当に人間の多様性の証しなのだろうか。バイリンガルに育った人は、自分のなかに、二つの言語システムの間をつなぎ、通底させる「第三の」自分をもっているのだろうか。興味あるところだ・・・・。

～村上陽一郎「しごとの周辺」(86.4.18 朝日新聞)より～

同時通訳・・・・・・者は、言われたことを、本当に自分のものとして理解（原文ではこの2文字に傍点あり）していたのでは、同時通訳は成り立たない・・・・・・。**ことばは人間の存在の様式を決め、思考の様式を決め、行動の様式を決める。**自分とは違う存在様式、思考様式、行動様式があることを教えてもくれる・・・・・・。

～同上(86.4.19 朝日新聞)より～